

## 第1章

### 障害者スポーツ選手のキャリア調査

本調査は昨年度から開始しており、選手一人ひとりの個人史ならびにスポーツキャリアに関わるインタビューを実施し、どのような環境、支援、他者との関わりの中でスポーツを始め、継続しているのかについて検討している。今年度は13名の選手に協力をいただき、オンラインもしくは対面で1時間30分程度インタビューを実施した。なお、事前に調査目的、個人情報の管理、調査の任意参加、調査協力を中止しても不利益が生じないこと等の同意を得た上で調査を実施した。協力いただいた選手は、男性10名、女性3名で、先天性障害4名、中途障害9名、年齢は23歳～65歳（平均40.3歳）であった。主な質問項目は、基本的属性、競技歴、障害発生から障害者スポーツ開始までの経緯、受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件、受傷前のスポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響、障害者スポーツ継続に関する状況、スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件、今後のスポーツ実施意向等である。

なお、本調査は日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認（申請番号18-11）を受けて実施した。また、調査にあたっては、日本福祉大学スポーツ科学部の安藤佳代子助教ならびに兒玉友助教の協力を得た。主な報告概要は次のとおりである。

調査結果より、それぞれのスポーツ開始の局面に着目すると、中途障害の選手を中心に病院やリハビリテーションセンター等の医療職や社会福祉協議会等の福祉職から、障害者スポーツに関する情報提供を受けるケースが多いことがわかる。また、リハビリテーションセンターで知り合った選手からの紹介で競技を始めたというケースがあり、同じ境遇の人々との出会いもその後のスポーツ参加を促進させる要因になるものと考えられる。

また、先天性障害の選手に関しては、学齢期の体育やスポーツ経験がその後のスポーツ活動の開始に大きな影響を及ぼすものと考えられる。本調査で先天性障害のある選手は4名と少数に留まっており、今後さらなる調査が必要となるが、4名のうち2名は小学校から普通学校に通学しており、体育は他の児童生徒と同様に行い、中学校進学後は運動部活動に加入していた。しかしながら、他の2名については学校体育に十分に参加できず、特別支援学校中学部に進学後、もしくは学校卒業後に医療職の紹介で現在の競技を開始している。校種を問わず、前者のように幼少期からスポーツに触れる機会があれば、その後よリスムーズにスポーツキャリアを積み重ねていくことができるのではないかだろうか。その一方で、後者のように学齢期に十分に体育やスポーツに触れられない環境に置かれてしまうと、本調査対象者は結果としてスポーツに取り組むことができているが、その後自発的にスポーツにアクセスすることが難しくなってしまうのではないだろうか。「（子どもの頃

に）スポーツはしてはいけないと思っていた。」「（周囲に）『足が悪い』ということだけを伝えており、皆の前で義足を見せることや外すことは絶対にせず、それを悟られないためにも体育に参加しないと自分の中で決めていた。」という両者の言葉が当時の体育、スポーツ参加の困難性を象徴していると言える。先天性障害もしくは幼少期から障害のある人々にとって、学校体育や運動部活動等の活動は単にスポーツキャリアの形成だけではなく、自身の障害受容や自己肯定感の涵養にも影響するものと考えられ、今後詳細に検討していくことが必要であると考えられる。

もう1点、スポーツ開始から継続へとつながるプロセスで重要なのが、種目ごとのクラブやチームの存在であり、調査対象者の多くが地元もしくは近隣地域の障害者クラブに所属をしてその後の競技継続へとつながっている。同じ立場の人々が競技をしている姿を目の当たりにすることで、自分自身のその後のスポーツキャリアを描きやすくなり、その後の積極的なスポーツ参加へとつながっているのではないだろうか。

また、スポーツ継続に影響を与えている要因として注目されるのが「アスリート雇用」の存在である。調査対象者の中で、国際レベルで競技に取り組んでいる現役選手のうち、複数名がアスリート雇用に転換し、競技に専念できる環境となっており、転職、転籍等を経ていない選手についても職務減免や職場の理解によって競技を継続している。パラリンピックを頂点とした障害者スポーツの高度化に伴って、国際大会への参加や海外遠征等が増加し金銭的な負担が増加していく中で、「所属先からの支援が重要」との声が多く選手から挙がっていた。調査結果より、アスリート雇用への転換や職場の理解、各種支援は東京2020オリンピック・パラリンピックの開催（2021年に延期予定）が決定した2013年以後に進んできており、パラリンピック開催に向けた障害者スポーツへの認知度の向上、関心の高まりが影響しているものと考えられる。

（河西正博）

## ■キャリア調査インタビュー一覧（昨年度実施分含む）

※パラスポーツ開始時の競技と現在の競技が違う場合は最初の競技開始時について記載  
※一般雇用には障害者雇用を含む  
※19-A～19-Iは昨年度報告書に記載の選手

項目	19-A	19-B	19-C
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	1	2	3
生まれた年	1967	1978	1956
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	一般雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	24	15	25
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	中度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	水泳	陸上競技	パラアイスホッケー
競技開始年齢	27	25	25
競技レベル	国際大会出場	国際大会出場	国際大会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	・リハセん指導員 ・看護師（妻）	・義肢装具士 ・クラブメンバー	・リハセん指導員
パラスポーツ開始場所	・リハセん	・障害者スポーツセンター ・地元陸上競技場	・リハセん
パラスポーツ情報提供者	・リハセん指導員	・義肢装具士	・リハセん指導員
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・入院時のため特に必要なし	・義肢装具士	・入院時のため特に必要なし
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・妻 ・チームメンバー	・義肢装具士 ・陸上仲間 ・妻	・妻 ・仲間 ・監督・コーチ
パラスポーツ継続状況	妻やチームメンバーの介助を受け週2回程度。近くのバリアフリープールで	夕方まで仕事をし、その後練習。帰宅は22時、23時。自宅近くの陸上競技場が拠点。車で移動。	週末早朝に長野県に出向き練習。この競技をなくしたくないという思いが強い。
支援	・勤務先・公的機関	・公的機関	・勤務先・公的機関
将来ビジョン	生涯現役	健常者の記録にどれだけ近づけるか。障害者スポーツの環境整備に貢献したい。	次世代の育成、競技普及にかかりたい。指導者は目指していない。
その他特記事項	水泳はパラリンピアンの講演をきっかけに開始した。	パラリンピック出場経験あり。地元で講演を年間40～50ほどこなしている。	意外と経済的負担が大きいので若手が育たないのではないかと考えている。パラリンピックメダリスト。

\*1 子どもの時から他スポーツもしていたが、進行性の障害のためパラスポーツを競技として始めたのがこの年齢である

項目	19-D	19-E	19-F
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	4	5	6
生まれた年	1996	1976	1976
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	選手雇用	一般雇用	一般雇用
障害発生年齢	0	0	28
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	重度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	卓球	陸上競技	車いすフェンシング
競技開始年齢	11	40 *1	28
競技レベル	国際大会出場	国内大会上位	国際大会出場
パラスポーツ開始時の重要な他者	・母 ・母の友人 ・障害者卓球クラブ監督	・家族 ・地元パラリンピアン	・妻
パラスポーツ開始場所	・福祉会館（障害者卓球クラブ）	・発掘事業	・県総合福祉センター (車いすバスケットボールクラブ)
パラスポーツ情報提供者	・母親の友人（障害児を持つ）→母親	・メディア	・妻 ・メディア（リアル）
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・母親	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・なし	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・弟（同じ障害を持つ選手） ・中学卓球部顧問 ・車いす卓球の師匠 ・練習相手としての父	・妻 ・仲間 ・監督 ・トレーナー	・妻 ・練習相手（健常者）
パラスポーツ継続状況	小学校で障害児卓球クラブで卓球を始め、中高と卓球部に所属。顧問の理解やバリアフリーの体育館があったことが幸いした。弟と切磋琢磨。	公務員となり生活が安定したことが継続の要因の一つ。毎週末に練習か大会。海沿いの堤防で練習。	現在練習中心の生活。アスリート雇用と同じ条件。地元高校や近県大学で練習。
支援	・勤務先・スポンサー・公的機関	・なし	・勤務先
将来ビジョン	2020後も現役続行。引退後は講演などをしたい。経験を下の世代に伝えたい。	仕事と両立させながらどこまでできるか考えたい。競技成績が上がることが動機づけになっている。	2020でメダルを取りたい。いつ引退するかは考えていないが何らかのスポーツに関わっていたい。
その他特記事項	最初は公務員だったが、練習環境を求めてアスリート雇用に。15年に弟は死去。	普通学校教員がパラスポーツ情報を知っていたらもっと早く始められたかもしれない。	28歳で車いすバスケットボール、30歳で車いすテニス、39歳で車いすフェンシングを始めた。上位入賞できる条件を考えて競技変更。

項目	19-G	19-H	19-I
調査年度	2019	2019	2019
通し番号	7	8	9
生まれた年	1969	1969	1971
性別	男	男	男
居住地域	東海	東海	東海
調査時身分	一般雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	28	36	21
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	軽度	中度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	アーチェリー	射撃	水泳
競技開始年齢	29	36	23
競技レベル	国際大会出場	国際大会出場	国際大会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	・会社の知り合い	・病院の教授	・友人（水泳） ・メディア ・後輩（PT）
パラスポーツ開始場所	・地元企業の倉庫（健常チーム）	・ゴルフ練習場	・地元スイミングクラブ（父親が所属）
パラスポーツ情報提供者	・会社の知り合い	・病院の教授	・後輩（PT）
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・会社の知り合い	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・家族 ・クラブの仲間	・妻 ・病院の教授	・受傷前からの水泳仲間 ・家族
パラスポーツ継続状況	現在健常者クラブと障害者クラブ（理事・強化担当）に所属。障害者の大会ではクラスがなくなったためパラリンピックに出場できない。国際大会に帯同している。	労災のため経済基盤は安定している。受傷後ゴルフをはじめいくつか競技をしたが、16年発掘事業に参加し、射撃を始めた。射撃はかなり費用がかかる。	週に4~5日、一般的なスイミングクラブで子どもたちに水泳を指導しつつ自分の練習を行っている。
支援	・なし	・なし	・なし
将来ビジョン	今後も健常、障害者両クラブに所属しアーチェリーを継続したい。	東京2020パラリンピック後どうなるか不安。日本障害者スポーツ射撃連盟が存続できるようにしたい。	東京2020パラリンピックに向けて取り組む。選手として、コーチとして今後も水泳を続けていく。
その他特記事項	国際大会チーム監督として帯同。クラス分けの厳密化によりパラリンピックでのクラスがなくなる。健常者クラブにも所属。	2018年フランスワールドカップに監督として参加。	受傷前から水泳をしており、高校総体や国体にも出場していた。

項目	20-A	20-B	20-C
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	10	11	12
生まれた年	1981	1975	1973
性別	女	女	男
居住地域	関東	関東	九州
調査時身分	一般ののち選手雇用	選手雇用	一般雇用
障害発生年齢	13	0	0
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	中度	重度	重度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	水泳/トライアスロン	アルペンスキー	アーチェリー
競技開始年齢	26	26	21
競技レベル	国際大会入賞	国際大会入賞	国内大会上位
パラスポーツ開始時の重要な他者	・パラ水泳コーチ	・義肢装具士	・ロス五輪オリンピアン(ネロリ・フェアホール) ・療育センター職員
パラスポーツ開始場所	・フィットネスクラブ	・スキー場(チェアスキー教室)	・障害者スポーツセンター
パラスポーツ情報提供者	・メディア(インターネット)	・義肢装具士	・テレビ ・療育センター職員
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・なし	・なし
パラスポーツ継続時の重要な他者	・会社のCSR ・会社の社長 ・サラ・レイナートセン選手 ・トライアスロンコース仲間	・アメリカ人コーチ	・地元アーチェリークラブの存在 ・妻
パラスポーツ継続状況	2008年～水泳、2013年～トライアスロン。2019年から会社の支援を得て、競技活動＝業務となった。競技継続には会社の理解が大きい。	2009年からアメリカを拠点として北京パラを目指している。	地元パラアーチェリークラブで活動。役職も務めている。選手雇用でないため遠征費とかは出ないが遠征時には配慮有。
支援	・勤務先	・勤務先	・勤務先・公的機関
将来ビジョン	生涯現役としてトライアスロンを続けていきたい。	現役の間は将来のことは考えにくい。	強化選手や代表選手を常に目指していくたい。普及と強化に関わっていきたい。
その他特記事項	13歳で障害発生以降、体育を含め一切スポーツをしなかったが自分を変えたくて3～10歳まで経験した水泳を開始。パラリンピック出場を契機に会社の理解が得られた。	子どもの頃は障害受容ができていなかった。周囲の人の歩み寄りが欲しかった。現在は競技に専念できる雇用形態である。	地元アーチェリークラブの代表。競技人口の少なさが役員継続の要因の一つ。デュアルキャリアを実践している。

項目	20-D	20-E	20-F
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	13	14	15
生まれた年	1983	1967	1970
性別	男	男	男
居住地域	関東	東海	東海
調査時身分	自営	選手雇用	自営
障害発生年齢	0	29	16
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	中度	重度	中度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	卓球	車いすテニス	水泳
競技開始年齢	9	33	36
競技レベル	国際大会入賞	国際大会入賞	国内大会上位
パラスポーツ開始時の重要な他者	・卓球に誘ってくれた小学校の友人 ・母親（卓球国体選手）	・福祉関係職員 ・車いすテニスクラブブリーダー ・入院仲間	・障害者水泳指導者
パラスポーツ開始場所	・小学校（卓球クラブ）	・地元市内テニスコート（クラブの練習場所）	・民間スポーツ施設
パラスポーツ情報提供者	・地元体育館ポスター	・市役所 ・社協	・パラ水泳指導者
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・パラ卓球クラブチーム監督 ・卓球仲間 ・弟 ・ライナー・シュミット選手	・クラブチーム仲間 ・同じクラスのライバル選手 ・指導者	・仲間 ・妻
パラスポーツ継続状況	高校卒業後一時卓球を中断していたが22歳から再開。仕事を一旦やめ大学へ。卒業後家業の傍ら卓球を続けている。	2010年にクアードクラスに転向し、翌年から国際大会出場。パラ出場を目指して。20試合くらい転戦。現在東京パラを目指している。	現在民間スポーツ施設や障害者スポーツ施設で水泳を継続している。競技をすると気持ちの浮き沈みがあるが、意欲が下がった時には健康づくりで始めたのだからと考え、気軽に水につかる。
支援	・勤務先・スポンサー	・勤務先・公的機関	・なし
将来ビジョン	障害があってもスポーツをすることは可能なことを子どもや親に伝えていきたい。	まずは東京パラリンピック。この年で頑張っていることをアピールしたい。引退後は後継を育てたい。	太らないよう継続したい。引退ということは考える必要はない。
その他特記事項	弟は日本パラ卓球協会の広報担当。	選手雇用、公的補助のおかげでコーチについて練習できるようになった。	パラ水泳を始める前、自ら民間スポーツ施設で様々なことをやり、その中で水泳を継続するようになった。その後、パラ水泳を知り、大会に出場するようになった。

項目	20-G	20-H	20-I
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	16	17	18
生まれた年	1993	1990	1997
性別	男	男	女
居住地域	東海	東海	北海道
調査時身分	その他	選手雇用	学生
障害発生年齢	0	18	14
障害内容	肢体不自由	肢体不自由	肢体不自由
障害程度	重度	中度	中度
学校種別	普通学校→特別支援	普通学校	普通学校
現在実施競技	陸上競技	車いすバスケットボール	車いすバスケットボール
競技開始年齢	14	20	18
競技レベル	全国大会出場	国際大会出場	国際大会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	体育教師（特支）	・ネット情報 ・チームのメンバー	・特になし
パラスポーツ開始場所	・特別支援学校（中学）	・特別支援学校体育館（クラブチーム練習）	・クラブチームの練習場
パラスポーツ情報提供者	・中学校教師	・インターネット	・小学校時代から地元にチームがあることを知っていた（大会が行われていた）。
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・本人（特支）	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・なし	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・特別支援学校教師（陸上部コーチ） ・両親	・最初に声をかけてくれた地元チームのメンバー（尊敬している） ・競技自体の魅力 ・海外の選手からの刺激など	・チームの主将
パラスポーツ継続状況	高校までは特別支援学校で練習。その後障がい者アスリートクラブ（陸上クラブ）で月2回、家での自主トレ（ローラー）	バスケットボールが面白くなり、地元チームの練習に加えて自分で体育館を借りて練習したりするようになった。現在、週に5日か6日練習している。地元チーム以外に県外のチーム練習にも参加している。	これまで好きだから続けていた車いすバスケットボールで、日本代表として活躍することが新たな目標として加わった。国際大会に出場して、多くの人の目に触れることで、これまで支援してもらった人たちに、自分はこれだけのことができるようになったのだと伝えることができる。感謝を伝えられる。
支援	・なし	・勤務先・公的機関	・スポンサー・公的機関
将来ビジョン	もっと速く走れるようになってパラリンピックを目指したい。	41、2歳の時にパラリンピックがあるのでそこまではトップ選手としていきたい。若い選手に日本代表はこういうものだというのを伝えたい。	将来は教員になりたいと考えている。現在、大学でも教職課程を履修している。そのため、日本代表の活動は、ある程度の期限を持って進めていきたいと考えている。クラブチームの活動は、一生懸命スポーツとして続けられる限り続けていきたい。
その他特記事項	阻害要因は、ケガや体調不良の影響。下がった気持ちを立て直す際に大きな影響となるのは、コーチの存在。	パラリンピック開催決定後の社会的变化が影響しているといえる：仕事の形態：学校事務（嘱託・アルバイト）→保険会社へ。金銭の心配なく練習時間も確保できるようになった。県からの強化費も受けられるようになった。	車いすバスケットボールをやると、ただの障害者ではなくて、アスリートでいられる。ネガティブだった自分のイメージも変わった。障害に対する考え方、アスリートのマインドを教えてもらえた。

項目	20-J	20-K	20-L
調査年度	2020	2020	2020
通し番号	19	20	21
生まれた年	1955	1980	1988
性別	男	男	男
居住地域	九州	関東	関西
調査時身分	その他	自営	選手雇用
障害発生年齢	23	24	0
障害内容	肢体不自由	視覚障害	肢体不自由
障害程度	重度	重度	軽度
学校種別	普通学校	普通学校	普通学校
現在実施競技	車いすテニス	柔道	パラバドミントン
競技開始年齢	26	25	21
競技レベル	国際大会出場	国際大会入賞	国際大会入賞
パラスポーツ開始時の重要な他者	・リハセンPT ・パラ観戦ツアー	・高校の同級生	・パラバドミントン強化コーチ
パラスポーツ開始場所	・リハビリテーション病院	・高校時代の同級生と	・地元パラバドミントンクラブ
パラスポーツ情報提供者	・リハセンPT	・高校時代の同級生（恋人）	・パラバドミントン強化コーチ
パラスポーツ開始場所へのアクセス	・リハセン	・本人	・本人
パラスポーツ開始前のスポーツの影響	・ポジティブ	・ポジティブ	・ポジティブ
パラスポーツ継続時の重要な他者	・妻 ・指導者	・視覚障害者柔道の先輩	・当時の強化コーチ ・同じ境遇の選手
パラスポーツ継続状況	練習時間の確保、大会の遠征費が捻出でき、比較的、日程調整が可能な非常勤の仕事を3つ掛け持ちしながら、競技に集中できる環境を整えた。	2006年に出場した初の国際大会で惨敗し、より一層練習に取り組むようになる。練習内容の変更、練習相手や環境を自らが積極的に動いて探した。同年に開催されたフェスティック大会で優勝して、2008年の北京パラリンピックに出場。	大学部活引退後にパラバドミントン日本選手権出場、準決勝敗退だったが強化選手に。大学院時代、最初の職場では練習は週に2～3回。東京パラを見据えて選手雇用に転職。現在複数拠点で練習。
支援	・なし	・勤務先	・勤務先
将来ビジョン	車いすテニスの日本代表強化に力を注ぐ。総合型地域スポーツクラブの立場から地域の障害者のスポーツ環境を整備する。	ライフワークとしては継続していく。選手として継続するかは、2021年の東京パラの状況を見て決めたい。	できる限り選手としてやっていきたい。
その他特記事項	パラリンピックを直接観戦したこと、自分も出場したいと大きな夢をもらった。車いすバスケットボールでの出場が厳しくなり、車いすテニスに転向。日本一となり、パラリンピック出場を果たす。	以前から柔道をやっており、受傷後、視覚障害者柔道を始めた。	もともとバドミントンをやっていた。途中でパラバドミントンを知り、こちらに関わるようになった。

項目	20-M
調査年度	2020
通し番号	22
生まれた年	1979
性別	男
居住地域	九州
調査時身分	その他
障害発生年齢	18
障害内容	肢体不自由
障害程度	重度
学校種別	普通学校
現在実施競技	陸上競技
競技開始年齢	25
競技レベル	国内大会上位
パラスポーツ開始時の 重要な他者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パラ陸上仲間 (せき損センターで知り合った)</li> <li>・障害者スポーツセンター職員</li> <li>・パラ陸上選手</li> </ul>
パラスポーツ開始場所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車いす陸上の選手らの練習場所（道路）</li> </ul>
パラスポーツ情報提供者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パラ陸上仲間 (せき損センターで知り合った)</li> </ul>
パラスポーツ開始場所への アクセス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本人</li> </ul>
パラスポーツ開始前の スポーツの影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポジティブ</li> </ul>
パラスポーツ継続時の 重要な他者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・車いす陸上日本代表選手</li> <li>・弟</li> </ul>
パラスポーツ継続状況	以前は週に6回練習していたが、現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で週に3～4回と減っている。アスリート雇用ではないため、練習や大会にかかる費用はすべて自費。
支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なし</li> </ul>
将来ビジョン	パラリンピック出場を目指す
その他 特記事項	入院中は障害者スポーツのことは考えたことがなかったが、せき損センターで出会った車いす陸上日本代表選手から車いす陸上を見に来ないかと誘われたことがきっかけとなり車いす陸上を始めた。

(藤田紀昭)

仮名 20-Aさん

インタビュー実施日時 場所 2020年9月25日 16:00-18:00 オンライン実施

個人基本情報	居住 関東地区 生年月日 1981年 性別 女 障害発生年齢 13歳 障害内容 疾病による右大腿部1/2以上欠損 リハビリ期間 切断後1年間 間欠的に入院治療
略歴	中高一貫校に在学中の13歳夏に骨肉腫を発症し右大腿部より切断、その後は義足を装着して通学、4年制大学を経て2004年から現在の会社に正社員として採用
競技基本情報	競技：水泳、トライアスロン (2008C県障害者スポーツ大会(水泳)で競技開始、2008-2012ジャパンパラ出場、2010アジアパラ出場) トライアスロン(2013年～) クラス分け S9(水泳)、PTS2(トライアスロン) 競技成績：2010アジアパラメダリスト、ジャパンパラメダリスト(水泳) 2016リオパラリンピック入賞(トライアスロン) 競技開始年齢：水泳(26歳) トライアスロン(32歳)
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯①：中学1年生の夏に骨肉腫発症、右大腿部より切断、義足を装着するようになる。2004年に新卒(22歳)で現在の会社に正社員として採用され勤務を続けていた2007年(26歳)に、自分が何か変わりたいと思って水泳を始める。13歳で切断してから学校の体育を含め一切スポーツをしてこなかったことから、自分に自信が持てるものが欲しいと思い、フィットネスクラブに入会し、3歳から10歳まで経験があった水泳を自分なりにやってみた。その後、インターネット検索で偶然「Cミラクルズ」という障害者の水泳チームを見つけ連絡して参加することになった。ここで障害者の水泳と出会うことになる。 経緯②：2009年から現在まで所属している「インターナショナルスマーニングスクール」では、朝練習を行ってから出勤していたが、その練習はトライアスロンコースだった。そこで水泳だけやっていたが、周囲はトライアスリートばかり、トライアスロンは身近であった。当時、自分は右脚がないからトライアスロンはできないと思っていたが、海外では同じ障害でトライアスロンをやっている人が何人もいることを知り、日本にも1名先駆者がいることがわかり連絡をとったところ「日本で1人

	<p>目になればいい」と背中を押された。</p> <p>始めた場所：①フィットネスクラブ、Cミラクルズ</p> <p>始めた場所：②Iインターナショナルスイミングスクール</p> <p>重要な他者：①Xコーチ、関東パラ水泳合宿の一般公募に応募して会った。それまで部活動を含めて一切の運動経験がなかった私に、競技を行うということ、トレーニングに向かう姿勢を教えてもらった。</p> <p>重要な他者：②Kさん、同じ障害でトライアスロンの先駆者、義足ではなく片脚で競技をしていたことから、海外での義足選手の事例を紹介し、競技への誘いをしてくれた。アメリカのサラ・レイナートセン選手、筋肉隆々で、堂々としていてかっこいい、その姿に憧れて自分もこんな風になりたいと思った。</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>① Cミラクルズ→障害者水泳との出会い。このチームに出会えたことが大きい。また関東パラ水泳合宿で会ったXコーチとのマンツーマンでの練習環境が構築できたことが非常に大きい。</p> <p>② Iインターナショナルスイミングスクールのトライアスロンコースで朝練習を行ってきたことが、トライアスロン競技が身近な環境を感じるきっかけになっており、先駆的な選手の存在、海外の競技情報やトライアスリートたちのオープンマインドな雰囲気が競技転向に影響を与えた。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	13歳で切断してから学校の体育を含め一切スポーツをしてこなかったことから、何かスポーツを始めたいと思った時に3歳から習っていた「水泳」が得意であることがスポーツ再開への誘いとなった。
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：①2012年のロンドンパラを目指すところまでは、通常勤務前後の時間帯に練習をしていた。水泳でのパラ出場は果たせなかった。</p> <p>継続状況：②2013年にトライアスロンに転向、通常勤務のままなので、有給休暇を使いながら海外遠征や合宿に参加し、有給休暇を消費後は「欠勤=減給」で競技していたが、その状況を会社が認めてくれていたので周囲に負担をかけているという思いを抱えながら行っていた。転機は2016年リオパラリンピック出場。会社主催で壮行会が開催され、本社社長と話す機会を得たこと。2019年からは全面的に競技活動=業務という形が</p>

	<p>とれるようになった。金銭的にも支援があり自己負担は一切ない。年間8戦程度国内外の大会にも出場してきた。同時に、勤務形態の自由度が増したことにより、従来は勤務時間の関係で断らざるを得なかった子どもたちへの教育講演等を、パラリンピアンとして平日でも実施できるようになり、選手としての活動の幅が広がった。このように競技を継続するにあたっては、会社の理解を得られたことの影響が大きい。</p> <p>主な実施場所：Iインターナショナルスイミングクラブ</p> <p>重要な他者：①Xコーチ ②会社のCSR、本社の社長、トライアスロンコースメンバー、サラ選手</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>①居住地近くに勤務先とトレーニングできるプールがあること。</p> <p>②トライアスロン転向にあたって、身近なトライアスリートたちのオープンマインドに触れ、「壁」を作っていたのは自分だと気付いた。また、パラトライアスロン競技者としてのロールモデルとなったサラ選手の存在が、自身の「障害受容」にも影響を与え、それまで常に使用してきた義足の外装を外すことができ、短パンでも外を歩くことができるようになった。</p> <p>2016年のリオパラリンピック壮行会が会社主催で開催されたことが契機で、周囲の社員から理解・応援されるようになる。また、本社社長と話す機会を得て、直接要望を伝えたところ、全面的に競技活動＝業務という形がとれるようになった。</p>
今後のスポーツ実施	・生涯現役としてトライアスロンを続けていきたい。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分を変えたくてスポーツを始めた。偶然が重なり障害者水泳やコーチとの出会いがあり、パラリンピックを目指すことへつながった。</li> <li>水泳からトライアスロンへの転向において、重要な他者との出会いが障害の捉え方に変化をもたらした。現在は自らがロールモデルとして後進を導きたいと思えるようになっている。</li> <li>競技と仕事の両立において、会社の理解と協力を得られたことが継続に大きく影響している。</li> </ul>

(齊藤まゆみ)

仮名 20-Bさん

インタビュー実施日時 場所 2020年9月24日 10:00-11:30 オンライン実施

個人基本情報	居住 関東地区 生年月日 1975年 性別 女 障害内容：先天性脛骨形成不全で3歳の時に両膝下を切断し、日常生活では義足を使用し競技時のみチェアスキーを使用している。
略歴	専門学校卒業後、臨床検査技師として就職し、その後2008年にアスリート雇用でA社に入社し、2015年から現所属のT社にアスリート雇用で転職している。
競技基本情報	競技：アルペンスキー（座位） 競技成績：2006年トリノパラリンピック（回転入賞）/2009年ワールドカップカナダ大会（大回転メダリスト）/2010年バンクーバーパラリンピック出場/2013年世界選手権スペイン大会（回転入賞・大回転入賞）/2014年ソチパラリンピック（回転入賞・大回転入賞）/2017年ワールドカップ白馬大会（大回転入賞）/2020年ワールドカップスロベニア大会（大回転メダリスト）
障害発生から障害者スポーツ開始まで	子どもの頃から義足を使っていたので、友達と遊ぶことはできても体育の授業にはコンプレックスがあり、小学校、中学校、高校の体育はほとんど参加していなかった。子どもの頃は、自分が義足を使っているということを周囲に伝えておらず、「脚が悪い」ということだけを伝えており、皆の前で義足を見せることや外すことは絶対にせず、それを悟られないためにも体育に参加しないと自分の中で決めていた。父や兄がスポーツに親しんでおり、自分も何かスポーツに携わりたいと思っている一方で、なかなかチャンスがなかったが、高校時代に陸上部のマネージャーとなり、スポーツに携わることができてとても嬉しかったという。 専門学校入学後、スキー教室に参加することができず、友人たちと一緒に行けなかったことがとても残念で、「自分も一緒にスキーをしたい」と思うようになった。その頃に知り合いの義肢装具士に相談をしたところ、チェアスキーを紹介され2001年から取り組むようになり、友人たちとスキーに行くようになった。 その後、技術が上がっていくにつれてよりチェアスキーが面白くなり、徐々に競技に移行していくようになった。また、友人の紹介で2009年

	からアメリカのチームで練習を行うようになり、現地のアメリカ人コーチに師事をしている。
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>専門学校時代に友人たちとスキーをしたいという思いから、義肢装具士の紹介でチアスキーを始めたが、それ以前からスポーツを楽しみたいという気持ちはあったものの、取り組むことはできなかった。</p> <p>自分自身や周囲の「障害受容」に関して、周囲の人々が障害を受け入れてくれ、一緒にやろうと歩み寄ってくれていたら違っていた（子どもの頃から体育やスポーツに親しむことができた）ように思う。自分自身に障害があるということを言えず、周囲もそれに対してあまり触れないようにしていたように感じていた。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	-
障害者スポーツ継続に関する状況	2001年からスキーを始めて、2006年のトリノパラリンピック出場時は仕事と両立しながら競技を行っていたが、その後トップ選手とのタイムが縮まってくる中で、海外で競技に取り組みたい、コーチに専門的な指導を受けたいと考えるようになり、2008年からA社にアスリート雇用で入社し、週3回ほど出社しながら競技を継続していたが、その後競技に専念できる契約となり、2015年から現所属のT社に転職し競技を継続している。
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>2009年からアメリカを活動拠点としているが、師事しているアメリカ人コーチの存在がとても大きい。知り合いの紹介でチームに参加するようになり、スキーは個人競技だけれどもチームの大切さを感じさせてくれる存在である。上手くいった時は褒めてくれ、時には心から叱ってくれることもあり、自分自身が苦しんでいる時にいつも寄り添ってくれている。</p> <p>また、2006年のトリノパラリンピックに出場した時に出会った男子立位クラスのメダリストが、何度もケガをしても競技復帰し、自分よりも年上であるが現役で競技を続けていることに強く刺激を受けている。</p>

今後のスポーツ実施	<p>現在のところは 2022 年の北京パラリンピックを目標として練習に取り組んでいる。自分としてはやれるところまで競技を続けて、その後に所属先も含めて関係者に相談したいと思っている。年齢が上がってくるにつれて、「セカンドキャリア」という言葉を聞く機会が増えてきているが、競技をしているとやめた後のこととはまだ考えられず、決めかねている状態である。</p> <p>現在の所属先で正社員として働くとしても、自分がどのような仕事をしていけるのか見えにくい部分があり、また、アスリート雇用以前と同様に病院で働くことも選択肢として考えている。</p>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"><li>・小学校、中学校、高校時代はスポーツに携わりたいと思いながらも、障害を周囲に悟られたくないという気持ちから十分に取り組めなかった。</li><li>・専門学校時代に友人たちとスキーを楽しみたいと思い、義肢装具士の紹介でチエアスキーを始めた。</li><li>・2008 年からアスリート雇用で競技に専念できるようになり、翌 2009 年からは練習拠点をアメリカに移し、2022 年の北京パラリンピックを目指して競技に取り組んでいる。</li></ul>

(河西正博)

仮名 20-Cさん

インタビュー実施日時 場所 2020年7月30日 18:00-19:30 オンライン実施

個人基本情報	<p>居住 九州地区</p> <p>生年月日 1973年（インタビュー時47歳）</p> <p>性別 男性</p> <p>障害発生年齢 生後3ヶ月、脊髄膜炎</p> <p>障害内容 脊髄損傷 1種1級 胸髄5番（体幹がほとんどない）</p> <p>リハビリ期間 幼稚園からリハビリ（幼稚園、療育センターに付設されている）。小学校は地元の公立小学校（祖父の力もあり普通学校に入学）。車いすで登校。校内の昇降移動は母親が担当。</p>
略歴	<p>幼稚園時代からリハビリ、普通学校に行き、体育はできるやり方で参加。障害児だから見学ということはなかった。水泳も浮き輪を使ったりハンディをもらったりして参加した。運動会にも参加した。</p> <p>中学も地元公立。中学校でも体育等は同様であった。サッカーや野球もできる方法で参加した。</p> <p>高校も地元高校。体育等は同様に参加したが、進学クラスで活発にスポーツをやるというほどではなかった。</p> <p>高校卒業後、歯科技工学校へ進学。仕事をしながら3年間通って歯科技士の資格を取得した。卒業後歯科技工士として働く。</p> <p>就学期間大変なということではなかったがやはり障害があり、仲間に入れないなどることはあった。</p> <p>歯科技工士から現在はY電機に勤務。地元パラアーチェリークラブ代表。</p> <p>2003年、30歳の時に結婚。</p>
競技基本情報	<p>競技：アーチェリー、コンパウンドのW2</p> <p>競技成績：インタビュー時、日本ランキング5位（コンパウンドの部）</p> <p>2020年2月にドバイの大会で団体メダリスト。強化選手に指定されている。</p> <p>競技開始年齢：21歳</p>

障害発生から 障害者スポーツ開始まで	<p>経緯</p> <p>専門学校卒業後、21歳の時、K市の障害者スポーツセンターでアーチェリーをやっているというのをテレビでたまたま見て、見学に行った。テレビに療育センターの職員が出ており、その後、療育センターでの身体測定の時にその人に声をかけたら、毎週水曜日にやっていると教えてくれた。すぐに見学に行った。アーチェリーはそれ以前からやってみたいと思っていた。</p> <p>アーチェリーに関心を持ったのはロス五輪の時に車いす選手がオリンピックに出場しているのを見たから。車いすバスケットボールや、車いすテニスと違って、健常者と同じルールでスポーツができるということで関心を持った。小学校から普通学校に行っていたということもあった。また、体の状態のこともあり、テニスやバスケットボールは難しいかもしれないがアーチェリーならできるんじゃないかと思った。それからすぐに始めた。</p> <p>それから1年もしないうちに大会に出た（最初はリカーブで）。</p> <p>最初にスポーツを始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・K市障害者スポーツセンター</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ロス五輪に出ていた車いすアーチェリー選手（ネロリ・フェアホール）</li> <li>・テレビに映っていた療育センターの職員</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>オリンピックに出場していた車いすのアーチェリー選手を見てアーチェリーに関心を持つようになった。本人の障害（体）の状態、また、普通学校に通学していたことも影響している。</p> <p>その後、地元K市でアーチェリーをやっていることをテレビで見、療育センター職員から情報を得て始めるに至った。地元にパラアーチェリークラブがあったことも大きい。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>ほぼ先天的な障害と言えるため記載事項なし。</p>

障害者スポーツ継続に関する状況	<p>K 市出身でもあることから、2013～2014 年頃からクラブの代表となった。事務的な仕事も含め、様々なことでアーチェリーに関わらざるを得ない立場であるし、責任もある。そうしたポジションにあることがアーチェリー継続に影響している。</p> <p>リカーブを射ていた最初の 1 年は点数が出なかった。歯科技工士ということで強い力で引くことは指先に影響があり、仕事に悪影響も出るのではないかというアドバイスもありコンパウンドに変更した。ルール的にも体力的にもこちらの方が自分に合っていた。</p> <p>誰かを師と仰いでいるわけではなく我流でやっているが、点数が出るようになると面白くなり続けている。</p> <p>家族（妻）の支えは大きい。遠征時のサポート（荷物の運搬等）をしてもらえるのはありがたい。</p> <p>会社は普通の契約社員で、遠征費とかは出ないがドバイの大会は出張扱いにしてくれた。</p> <p>強化選手になったので少しは協会から補助金等を上乗せしてもらえるかもしれない。</p> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地元パラアーチェリークラブの存在。</li> <li>・妻</li> </ul>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>地元にパラアーチェリークラブがあったことが大きい。またそのクラブの幹部になったことで競技以外にやるべき仕事もあり、継続につながっている。</p> <p>競技を継続する中で成績が上がることが継続のモチベーションとなっている。</p> <p>仕事をしつつ、競技も続けるというバランスの良さが継続の要因とも言える（仕事があり、生活基盤が安定しているから競技も継続できる）。</p> <p>配偶者が様々な形でサポートをしてくれていることも継続するにあたっての要因である。</p>

今後のスポーツ実施	<p>強化選手や代表を目指して毎年、挑戦はしていきたい。目標があるということはモチベーションになる。</p> <p>試合に行けばいろいろな人とのコミュニケーションもあるし楽しいし継続していきたい。</p> <p>アーチェリーをやめるという気はない。選手層が薄いのでクラブの現在のポジションもなかなかやめられない。</p> <p>普及と強化には関わっていきたい。実際にはなかなか機会がないが、機会があれば、自分の持っている知識や技術を必要としている選手に伝えていきたい。そんな中から日本代表なんかが出れば誇らしい。</p>
まとめ	<p>小中高、専門学校と普通学校に通学していたことが、健常者と同じようにできるアーチェリーへの志向性に影響している。アーチェリー開始にあたってはメディア（テレビ）からの情報、知り合い（療育センター職員）の存在が影響していた。</p> <p>地元K市に障害者スポーツセンターがあること、そこにパラアーチェリーのクラブがあったこと、車の運転ができることがアーチェリー開始の要件として考えられる。</p> <p>継続にあたっては、地元パラアーチェリークラブの代表者としてのポジション、技術や成績の向上、デュアルキャリアの実践、配偶者のサポートが影響していると考えられる。競技人口の少なさがクラブ役員継続の要因の一つになっていた。これらは地域における他競技にも同様に言えることである。</p> <p>将来的にも目標を持って競技を続けるとともに、普及や強化にも機会があれば関わることを考えている。</p>

(藤田紀昭)

仮名 20-Dさん

インタビュー実施日時 場所 2020年7月27日 14:00-15:30 オンライン実施

個人基本情報	居住 関東地区（2019年4月までは九州地区） 生年月日 1983年（インタビュー時36歳） 性別 男性 障害発生年齢 先天性 障害内容 二分脊椎 障害手帳は3級 歩いたりゆっくり走ったりできる。
略歴	小中高と普通学校に通学。高校卒業後22歳まではアルバイト、その後一般企業に就職。27歳で退職しF大学商学部に入学。小中高大と卓球クラブ、卓球部に所属した。大学卒業後は家業を手伝う。現在は4社がスponサーについている。
競技基本情報	競技：卓球、国内ランキング1位 国際ランキング30位台 クラス分け CLASS8（立位） 競技成績：アジア競技大会メダリスト、ワールドツアーダイバード大会メダリスト 競技開始年齢：小学4年（9歳）
障害発生から 障害者スポーツ開始まで	経緯（高校まで） 走れない分、上半身のトレーニングは他の人以上に行った。そのことは卓球を始めてからも影響があったかもしれない。 先天的障害だが小中高と普通学校に通学。 体育も多少ハンディがあったが、すべて参加していた。親の事前の希望が学校に伝えられていたと思う。 小学4年の総合学習の時間でクラブ活動というのがあって、2週間に1度ほど卓球クラブに参加。卓球に入ったのは仲のいい友人に声をかけられてたまたま。卓球がどんなものかも知らなかった。 実は母親は卓球の国体選手だったがこの時まで知らなかった。その後母親から回転をかけたサーブ（魔球のような）を教わり、この時は障害のない子どもにも勝ったりした。 中学に入ってから、部活に入ると高校入試の時も有利だろうと卓球部に所属した。中学1年生の地区大会では優勝した。これでちょっと卓球にのめりこんだ。→校内での表彰の時、なんでお前なんかがという友人

	<p>の視線もあり、さらに頑張った。</p> <p>中学3年くらいからは周りの生徒も技術をマスターし、体力的にも差が出てきたのでだんだん勝てなくなつた。ただ工夫すれば対等に戦えるところが面白かった。</p> <p>高校では県大会に進むことと、レギュラーになることを目標に頑張つた。練習は4時過ぎから10時くらいまでやっていた。</p> <p>パラ卓球との出会いは中学2年時。地元の市立体育館にポスターが貼ってあったのを見て大会に出た。その後中学2年から高校の時は年に2～3回大会に出ていた。この頃からパラリンピックを目指に頑張っていた。周りからも頑張ればパラリンピックに出られると言われて（実際にどうやって出るかまでは知らなかった）。</p> <p>パラリンピックに出るために国際大会に出なくてはならず、お金も300万から400万円必要だと言われ、経済的に厳しいことから努力しても出られないと感じ、一度断念した。</p> <p>最初にスポーツを始めた場所</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校（卓球）</li> </ul> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卓球に誘ってくれた友人</li> <li>・母親（卓球国体選手）</li> </ul>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>先天的な障害であるが、歩行が可能なこともあります、小中高と普通学校に通った。そのため小学校の卓球クラブ、中学・高校の部活の卓球部も障害のない児童生徒とともに練習、大会に参加していた。</p> <p>母親が卓球の国体選手であったことから技術的な指導を受け、中学2年生くらいまでは地区でもトップクラスの選手であった。</p> <p>一方、中学2年生からパラ卓球の大会にも参加していた。パラ卓球の存在は地元の市立体育館に貼ってあったポスターで知った。</p> <p>高校時代はパラリンピックを目指そうとしていたが、金銭的な理由から努力が報われないと考え高校卒業後一旦、卓球から離れた。</p> <p>先天的障害であったことから下半身を鍛えることが難しい代わりに上半身をトレーニングしており、卓球にも影響していると考えている。</p> <p>中学時代、校内の表彰時に他の生徒から「なんでお前が」というような視線を感じたが、それが逆に卓球へ向かう気持ちを高めた。</p>

受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	先天的障害のため記載なし。
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>(高校卒業後から)</p> <p>高校を卒業してしばらく卓球はお休みしていたが、22歳の時、福岡の障害者卓球チームの会長の強い勧めと、友人のチームから練習に誘われて再開した。22～23歳の時に香港の大会に出て障害の重いドイツの選手が努力している姿に感動して、自分もあのようになりたいと思った。この選手を見て金銭的なことは何一つ解決できていないにもかかわらず、国際大会を見据えて頑張ろうと思った。</p> <p>F大学は卓球の強い大学(それもあってF大学を選んだ)。そこで一般学生として障害のない学生と一緒に練習をしていた。九州学生大会には出場していた。</p> <p>大学に入った2011年頃から再度パラリンピックを目指そうと思った。学費のこともあり、学生で国際大会に出てロンドンを目指すのは難しいと思いリオを目指すことにした。</p> <p>卒業後、実家の会社に入り卓球を続けた。仕事をしながら卓球を続けるのにはアスリート雇用などなかったこの時期には一番都合が良かつた。</p> <p>国際大会を目指すようになっても金銭的な制約があり、国際大会は年に2～3大会が限度であった。これではなかなかランキングポイントが取れずパラリンピック出場は難しい。</p> <p>2015年にはリオ大会出場がかかっていたので12の国際大会に出場。前年の2014年頃から少しずつスポンサーがついてくれるようになった(個人、あるいは協会に)。自分たちで企業をめぐって獲得していくたが、リオには6ポイント届かず(自分より上位に6名いて、ポイントでその6名を追い抜けなかった)出場できなかった。</p> <p>卓球を続け、試合に臨んだり、海外遠征したりするのには弟の存在が大きかった。</p> <p>重要な他者</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パラの選手ではなく、別の学校に通っていた人</li> <li>・福岡のパラ卓球のクラブチームの監督（年1回でも大会に出るためチームにつなぎとめてくれていた）</li> <li>・ドイツのライナー・シュミット選手</li> <li>・卓球選手で活躍していた弟、現在、日本パラ卓球協会の広報。</li> </ul>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>卓球仲間から誘いを受け、一旦離れていた卓球を再開することとなった。</p> <p>初めて参加した香港での国際大会でドイツの選手を見て大きな影響を受け、卓球への思いが強くなった。</p> <p>国際大会、とりわけパラリンピックを目指すためには海外大会でポイントを積み重ねることが必要で経済的には厳しいものがある。</p> <p>しかし、リオ大会前からスポンサーがつき始め、2015年には12回の海外遠征が可能となった。</p>
今後のスポーツ実施	<p>現役を引退したのちは卓球を通して病気などで入院していて運動する機会や情報がない子どもに体を動かす機会を作るような活動をしたい（障害があってもスポーツをすることは可能だということを子どもたちと「親」に示し、人生の選択肢を増やしてあげたい）。</p> <p>パラ卓球の国際試合に合わせた観戦ツアーや現地で卓球交流を行うなどの事業もやってみたい。</p>
まとめ	<p>先天的に障害があったこと、また歩行が可能であったことから普通学校に通い、そこで卓球と出会った。その後も障害のない選手と一緒に練習する中で力をつけてきた。</p> <p>高校時代までパラリンピックを目指そうとしていたが、経済的側面が課題であった。</p> <p>一旦卓球を離れるが、卓球仲間やクラブ会長、ドイツの選手などの影響を受け、再度パラリンピックを目指すことになる。</p> <p>大学卒業後は実家の会社に入り、働く傍ら卓球を続けている。2014年からスポンサーがつき始め、経済的支援等を受けられるようになった。</p> <p>コロナ感染状況下でポイントとなる大会に出られず、パラリンピックに出られるのか、またスポンサーに対しても現状を理解してもらうために苦慮している。</p>

(藤田紀昭)

仮名 20-Eさん

インタビュー実施日時 場所 2020年2月25日 Gメモリアルセンター会議室

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1967年（インタビュー時52歳） 性別 男性 障害発生年齢 1997年1月 29歳 障害内容 ギランバレー症候群 リハビリ期間 発症後3年半入院、その後7年くらいかけて体の状態は少しづつよくなる。
略歴	高卒後社会人に。 現在、アスリート雇用（東京の会社）。つなひろワールドを利用して雇用してもらった。給料のみ支払ってもらっている。契約は2018年2月から2021年2月まで（3年契約）。会社には一度も行ったことがない。 その後のことは何も決まっていない。
競技基本情報	小・中学校は野球、高校卒業後就職し、草野球やスキー（20歳から9年間）をしていた。 競技：車いすテニス クラス分け クアードクラス 競技成績：世界ランキング10位台、日本ランキング7～8位 競技開始年齢：33歳
障害発生から 障害者スポーツ開始まで	経緯 32歳で退院後、市役所や社協に行き情報をもらい、デイサービスに通うようになった。その施設に体育館があった。そこで、ボッチャや卓球、バスケットボールなどの道具があり、体を動かした。 翌年2001年、33歳の時に社協で車いすテニスに関する情報を得てコートに行った。35、6歳までは月に1度コートに行って少し体を動かす程度だった。 最初にスポーツを始めた場所 K市福祉の里（複合福祉施設）体育館 テニスを始めた場所 市内テニスコート（市内車いすテニスクラブの練習場所）

	<p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・福祉の里の職員（社協）（社協からの情報）           <p>とにかく体を動かしたかった。最初の情報が卓球だったら卓球をやっていたかもしれない。また、車に車いすをのせる方法なども教えてくれた。</p> </li> </ul> <p>① K テニスクラブのリーダー ② 生きていく上で、入院仲間の存在が大きかった。</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>スポーツに関する情報の出どころとしては社会福祉協議会であった。当該選手はその情報に自らアクセスしていた。</p> <p>社協に隣接の体育館で体を動かし始めた。最初の頃は病気の影響でラケットもしっかり持てないような状態だった。そこから少しづつ体が回復し、テニスのようなことができるようになった。</p> <p>同じく、社協で車いすテニスの情報を得てクラブに顔を出すようになった。</p> <p>35、6歳でテニス用車いすを購入し、それから本格的に練習するようになった。大体週1回くらいのペースで。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>障害を持つ前は、野球やスキーをやっていた。その影響はプラスに働いている。</p> <p>特に野球は同じ球技で道具を使う。バットがラケットに変わったという感覚が大きい。ボールを芯で飛ばすというところも似ている。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況</p> <p>最初にテニスの大会に出たのは岩倉市のニューミックス大会。チームの仲間に誘われた（38、9歳の時）。</p> <p>次に大阪のシングルスの大会に出場した。負けたけど楽しかった。100人からの車いすテニスプレイヤーが集まり活気があった。それから練習し、B クラスくらいまで行った。</p> <p>2010年にクアードクラスに転向した。転向はクアードクラスの存在を知ったのち、車いすテニス仲間のアドバイスを受け、諸手続きを経て転向した。</p> <p>2010年のジャパンオープンの時、世界で戦う気があるか、車いすテニス協会の人に聞かれ軽い返事でやってみると答えた。</p>

	<p>2011年の韓国の大会が初めての国際大会だった。それから翌年のパラリンピックを目指し、ランキングを取るために20大会くらい出場した。</p> <p>経済的には非常に苦しかった。ロンドンパラリンピックではダブルスで入賞。その時、次はメダルが欲しいと思った。</p> <p>リオ大会にも出場。経済的にはやはりずっと大変だった。リオではシングルスは1回戦、ダブルスも1回戦で負けた。</p> <p>東京大会開催が決まっていたのでそれまでは続けようと思った。</p> <p>現在は県の強化選手になっており、強化費として相当額をもらっている。</p> <p>おかげでコーチをつけての練習などができるようになった。東京ではぜひメダルを取りたい。</p> <p>主な実施場所 県内テニスコート</p> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・県内のテニス仲間の存在が大きい。</li><li>・また、同じクラスのライバルでもあるK選手の存在も大きい。国際大会のダブルスなど一緒に組んで出場している。</li><li>・3年前からついて練習しているコーチの影響も大きい。</li></ul>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>大会に出場することで少しずつ上を目指す気持ちが生まれ、このことが継続へのモチベーションとなっていると考えられる。</p> <p>クアードクラスへの転向によりランキングが上がり、世界の舞台で活動するきっかけとなった。</p> <p>重要な者として県内テニス仲間、ライバルでもありチームメートでもあるK氏、コーチが挙げられている。日常的な練習仲間、日本代表レベルでのライバル、強化を支えるコーチである。</p> <p>東京パラリンピック開催の影響は、企業契約や県からの強化費の受け取りなど経済的側面においてプラスに働いていた。</p>
今後のスポーツ実施	<p>まずは東京パラリンピック。この年齢で頑張っているというところをアピールしたい。</p> <p>いずれは引退することになる。引退したら後継を育てたい。それは今も同じ気持ち。今でも若い選手と一緒に練習する中で彼らを指導して育てたいと思う。できれば地元で。</p>

まとめ	<p>受傷後、スポーツを始めるに際しては、とにかく体を動かしたいという気持ちがあり、自ら市役所や社協を訪れ情報を得ていた。またその社協に隣接して体育館があり、そこでスポーツを始めることができた。</p> <p>また病気の最中は同じ入院仲間との出会いが生きる上で大きな支えとなっていた。</p> <p>のちに、社協から車いすテニスの情報を得て、ここでも自ら車いすテニスチームにアクセスしていた。</p> <p>本人にスポーツをやりたいという欲求があったこと、社協にそうした情報があったこと、スポーツへの導入場所となる体育館が社協に隣接していたこと、車いすテニスに関しては居住地近くに車いすテニスチームがあったことがスポーツを始められた要因である。</p> <p>車いすテニスを本格的に始めてからは上を目指そうとする向上心や日頃から一緒に練習している仲間、ライバルであり、代表チームの仲間であるK氏、2018年以降指導してもらっているコーチが重要な他者と言える。</p> <p>東京パラリンピック開催決定後、企業契約や強化費により経済的にサポートしてもらえるようになっていた。このことが競技力向上に大きな影響を与えていていると考えられる。</p> <p>現役引退後は地元を中心に後継選手の指導をしたいと考えていた。</p>
-----	---

(藤田紀昭)

仮名 20-F さん

インタビュー実施日時 場所 2020 年 2 月 24 日 13:00-15:00 G 県福祉友愛アリーナ

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1970 年（インタビュー時 49 歳） 性別 男 障害発生年齢 16 歳 障害内容 左上肢機能全廃 入院リハビリ期間 1 年程度
略歴	高校 1 年生の時に事故。1 年後に定時制高校へ入学しなおし、IT 関係の仕事をしながら卒業。その後、IT 関連の仕事で何度か転職を経て、現在独立して仕事を行っている。IT 関連の本も出版している。28 歳で結婚。家族は妻。
競技基本情報	競技：水泳 クラス分け S8 クラス 競技成績：ジャパンパラ競技大会優勝 競技開始年齢：36 歳頃
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯① 高校 1 年生の時に、オートバイの自損事故により転倒時に左側面を打ったことで左機能障害が残り、その後神経移植を行い肩あたりまで動くようになった。事故後、3 か月入院し、転院し手術して、翌年の春には定時制高校へ転学した。仕事をしながら高校へ通っていたので、運動は全くしなかった。定時制高校 1 年生の時はプログラムの勉強をして、ある程度できるようになった 2 年生からコンピュータ関係の会社に就職し、仕事と学業の両立となった。プログラムは、高校のある先生が教えてくれた。卒業後、何度か IT 関連で転職を経て、現在は独立して仕事を行っている。30 歳くらいから、健康診断でお腹回りや体重の増加が気になりだして、健康づくりのために運動するようになった。近くの民間スポーツ施設でいろいろなことを試して、プールだけ通うようになった。 経緯② 水泳は全く泳げなかったので、民間スポーツ施設のプライベートレッスンを受けて泳げるようになった。2006 年からマスターズ大会に出場するようになった。大会の飛び込み練習のために別の練習場所に行き、H

	<p>さん（水泳の有力者）、Uさん（障害児水泳を指導している方）に会い、障害者の水泳大会やパラリンピックというものがあることを知る。2006年にマスターズ大会（レインボーカップ）に出場し、小さなマスターズ大会に出た後、2007年に中部障がい者水泳選手権大会に出場し、ジャapanパラ大会の標準記録を突破しジャapanパラ大会に出場した。ジャapanパラ大会では、ベンチテストが実施され、たまたま参加した時期が国際大会と併用していたもので、国際クラス分けを受けることができた。初出場のジャapanパラ大会は泳法違反で失格となってしまった。その後、毎年障害者の水泳大会にも出場するようになった。</p> <p>始めた場所：民間スポーツ施設</p> <p>重要な他者：Uさん（障害児水泳を指導していた方）</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>① 健康診断で自分の結果が気になったことで、健康づくりのために運動を始めた。友達と一緒に禁煙ができるかといったゲーム感覚で始めたことも楽しみながら始められた。</p> <p>② 民間スポーツ施設で水泳仲間ができて、マスターズ大会を知ったこと。民間スポーツ施設以外へ練習に行ったことで、障害者水泳に出会えた。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	中学校から高校1年生まではバスケットボール部（事故を起こすまで）小学校まではスポーツに取り組むというより、山や川など自然を活用して毎日遊んで、走り回っていた。
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況</p> <p>健康づくり、ダイエット目的で始めたこと。</p> <p>仲間がいて楽しいこと。</p> <p>練習環境が合っていた。</p> <p>主な実施場所 民間スポーツ施設、G県福祉友愛プール</p> <p>重要な他者 仲間、友達、妻</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	競技を行うと気持ちに浮き沈みがある。意欲が下がった時には、結局健康づくり目的で始めた水泳だからと考えて、気軽にプールにつかろうと思っていくようになると、仲間もいることで徐々に楽しくなってきていつも通り泳ぐようになっていく。その繰り返しで続けられている。

	<p>仲間と環境の影響が大きい。</p> <p>妻は食事に気を付けてケアをしてくれている。トレーニングだけではなく、食事も重要な支援。</p> <p>水泳は、用具費用があまりからないこともあります、水泳を継続するまでの阻害要因はあまりない。</p>
今後のスポーツ実施	<p>太らないようにトレーニングを継続していきたい。引退するという考え方方は必要ないと思っている。自分のペースに合わせて続けていきたい。</p> <p>指導者ということは考えていないが、障害者の方に時々アドバイスは自分なりにしている。</p> <p>今後、障害者とか健常者とか関係なく、水泳ができる環境になると良いと考えている。</p>
まとめ	<p>30歳から健康づくり（ダイエット）のために水泳を始めたのがきっかけ。友達と一緒に禁煙ができるかといったゲーム感覚で始め、楽しむことができたこと、水泳仲間ができたことも継続要因の一つ。</p> <p>練習環境が合っていたことが、継続要因に大きく影響している。</p> <p>健常者のマスターズ大会出場のため、別の場所での練習を行ったことで障害者水泳の大会を知ることになった。2007年から障害者水泳の大会にも出場している。</p> <p>2011年から7年連続ジャパンパラ競技大会でメダリスト。2012年には日本記録を更新した。残念ながら、パラリンピック出場は叶わなかった。</p> <p>今も現役であり、これからも優勝目指して頑張っていく。また、老人になっても楽しんで、健康づくりのためにトレーニングを継続していくと考えている。</p>

(安藤佳代子)

仮名 20-Gさん

インタビュー実施日時 場所 2020年2月24日 10:00-12:00 G県福祉友愛アリーナ

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1993年（インタビュー時25歳） 性別 男 障害発生年齢 0歳（1歳時に障害認定） 障害内容 脳性麻痺（体幹機能全廃、上肢左右に著しい機能障害）
略歴	先天性障害。小学校までは地域の通常学校へ通い、中学校、高校は特別支援学校。卒業後就職するが、現在は退職して無職。就職経験は2か所。 中学1年生で車いすバスケットボールの部活に入り、その後中学2年生から陸上部へ変わり、その後は陸上競技を継続して現在に至る。
競技基本情報	競技：陸上 クラス分け T34 競技成績：全国障害者スポーツ大会メダリスト（2012年）、ジャパンパラ陸上競技大会入賞（2016年） 競技開始年齢：14歳（中学2年生）
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯① 三つ子で生まれて、1歳の時に障害があることがわかった。歩行器やクラッチを使用して歩いていたが、成長とともに車いすを使用するようになった。小学校では、体育はできるだけ参加をしていたが、成長とともに健常者の同級生が勝ち負けにこだわり出した頃から、人間不信になってしまった。中学校から特別支援学校に通うようになり、その頃から車いすを使うようになった。元々スポーツは好きではなかったが、学校で車いすバスケットボールの社会人チームが練習していたことから、車いすバスケットボールの部活に入ることになった。 経緯② 車いすバスケットボール部は1年間で辞めて、陸上部に入り、競技をするようになった。現在のコーチ（特別支援学校の先生）と出会ったことが陸上を始めるきっかけになった。初めて出場した県大会で、50m走とソフトボール投げで大会新記録を出した。

	<p>始めた場所 特別支援学校（中学部）</p> <p>重要な他者 特別支援学校の先生 2 名（3 年間担任、体育の先生（陸上コーチ））</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>小学校では理科の実験でも見学するといったように制限されている学校生活であったが、特別支援学校に中学部から通うようになって、これまで止められてきたことをいろいろとできるようになって、スポーツにも挑戦するようになった。</p> <p>中学部での 3 年間を通して面倒をみてくれた担任の先生と、陸上部で指導してくれた先生に出会ったことで、精神的にも向上できた。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>先天性なので、受傷前のスポーツ経験はない。</p> <p>実際にはスポーツを始めたのは中学生からであるが、もっと小さい頃からスポーツを行える環境にあった場合の意見として下記に示す。</p> <p>（選手の意見：障害者＝スポーツはしてはいけないと思っていた。もっと早く知っていればまた違った選択をしたと思う）</p> <p>（選手の母の意見：今だから言えることとして、もっと小さい頃からスポーツを行う環境においていたら違っていたと思う。障害児がスポーツを行うには、家族の後押しが大事になる。地域で障害者スポーツができる環境や回数をもっと増やしていくと良いと思う）</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校までは特別支援学校で練習</li> <li>・G 障がい者アスリートクラブ（陸上クラブ）月 2 回</li> <li>・家の自主トレ（ローラー）</li> </ul> <p>主な実施場所 特別支援学校、陸上競技場（関市の中池か洞戸）</p> <p>重要な他者 特別支援学校の Y 先生（陸上コーチ）、両親</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>中学部での練習は週 2 回、高等部になると自主練が入ってきて練習も増えた。</p> <p>  選手の講演会に参加したことをきっかけに、時々会う機会を作ってもらえた。  選手の影響もあり、高校を卒業すると同時に自分用にレーサーを作った。その時以来替えていなかったレーサーを改造した。</p> <p>地元 G 県で全国障害者スポーツ大会が実施されることが決まったことで、強化練習などが実施されていた。大会後に障害者の陸上クラブ（ア</p>

	<p>スリートクラブ) が立ち上がった。</p> <p>特別支援学校卒業後に就職したが、その就職先で障害や競技への理解が得られず退職せざるを得なかった。小学校での経験により、人間不信によるうつ傾向が、職場の理解が得られないことで再発してしまった。職場の理解が得られることが、競技を継続することの重要な要因である。仕事と競技の両立は難しい。</p> <p>陸上を始めた時に指導してもらったY先生が現在もコーチとして指導を担当してくれている。</p> <p>2年くらい前から、障害の影響で車の運転ができなくなってしまったことで、送り迎えをお願いしている。練習場所が自宅から距離がある。</p> <p>優秀な若手選手が数多く出てきている。県大会では優勝しても、ジャパラ大会になると勝てない。パラが注目されて嬉しいが、優秀な若手選手が多く出場てきて勝てなくなってしまった。26歳でもベテランに位置づけられる。最近は、自分に勝つつもりで標準記録を突破することやタイムを維持することを考えて練習している。</p> <p>継続するために一番重要なことは、気持ち。コースに入った時にとても気持ちが良い。それが競技を辞めたくない理由。</p> <p>阻害要因①は、ケガや体調不良の影響。下がった気持ちを立て直す際に大きな影響となるのは、コーチの存在。</p> <p>阻害要因②は、練習環境と用具費・遠征費の費用面。維持費もかかるので、その面で競技を継続できない人も多くいる。</p>
今後のスポーツ実施	<p>20秒台とか21秒を出すことを目標に競技を頑張りたい。</p> <p>パラリンピックを目指したい(Y先生に恩返しをしたい)。</p> <p>I選手のような選手になりたい(区分は違うが、競技に対する精神面などを見習えたらと思っている)。</p> <p>パラスポーツをもっと知ってもらえるよう、認知度が上がって欲しい。全スポ出場の際には、注目してくれたが、ジャパラ等の出場は注目されず、反応も薄い。</p>
まとめ	<p>特別支援学校に中学部から入り、スポーツを行うきっかけを得た。先生に陸上を教えてくれる方がいたことで、陸上を行い、現在に至る。コーチもその時のコーチが今でも指導を行ってくれている。</p> <p>地元県での全国障害者スポーツ大会が実施されることが決まり、スポ</p>

	<p>ーツ環境が変わっていった。大会終了後に、障害者の陸上クラブができた。</p> <p>特別支援学校卒業後は、陸上クラブで練習を行っている。</p> <p>学校卒業後、就職先で競技や障害の理解が得られず、退職することに。現在は無職。将来的には就職をしなくてはいけないと考えているが、現在は競技に集中したい気持ちが強い。</p> <p>現在は、レーサーを改造して、新しいフォームに挑戦中。</p> <p>将来、パラリンピックに出場して、コーチに恩返しをしたい。</p>
--	--

(安藤佳代子)

仮名 20-Hさん

インタビュー実施日時 場所 2020年2月26日 G県障害者スポーツ協会会議室

個人基本情報	居住 東海地区 生年月日 1990年（インタビュー時30歳） 性別 男性 障害発生年齢 2008年6月 18歳 障害内容 下肢切断および機能障害（交通事故） リハビリ期間 入院7か月、20歳まで入退院の繰り返しで事故後約2年間。
略歴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中学校では野球（キャッチャー）。</li> <li>・高校卒業後フリーターの時に交通事故。</li> <li>・20歳の時（2010年）から車いすバスケットボールを始める。</li> <li>・地元チームとしては日本選手権には出た経験がない。</li> <li>・24歳の時学校職員嘱託になる。</li> <li>・2016年日本代表チームに声がかかった。代表入りはリオ後2017年から。</li> <li>・2017年から現在まで大手保険会社社員（日本車いすバスケットボール連盟のサポートにより）。</li> <li>・2018年世界選手権上位</li> </ul>
競技基本情報	競技：車いすバスケットボール クラス分け 持ち点3.5点 競技成績：日本代表候補 競技開始年齢：20歳 現在、日本代表候補、持ち点3.5で体が大きい（190cm）のが特徴の一つ。
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 20歳でリハビリがおおよそ終わるという目途がつき、仕事もしておらず、時間があり、車いすでみんなと遊ぶというのもイメージがわからず、何か競技でもやろうと考えた。車いすの人は普通に車いすスポーツをするというイメージがあった。 リハビリ中は病院スタッフの支えが大きかった。

	<p>車いすバスケットボール、車いすテニス、パラ陸上は漠然と知っていた。</p> <p>県内で車いすバスケットボールをやっているところをネットで探し、見学に行った。楽しそうだし、すごいと思った。それから少しづつ練習に参加。</p> <p>練習場所は 40～50 キロ離れていたが、事故前に車の免許を取っていたので、車に手動装置を付けて、免許も車いす用に条件を書き換え、週1回、自分で運転して通った。</p> <p>親の友人に車いすの人があり、親が福祉関連の仕事をしていることも情報取得や車いすを身近に感じたりする上で影響あり。</p> <p>最初にスポーツを始めた場所</p> <p>S 市の特別支援学校の体育館（この卒業生が集まって作ったチームだった）。</p> <p>重要な他者</p> <p>ネット情報、チームのメンバー</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>ネットの普及</p> <p>障害者スポーツに関する情報の普及</p> <p>特別支援学校卒業生を中心とした車いすバスケットボールのチームの存在</p> <p>医療関係者の支え</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>野球をやっていた。多少ともプラスになったのではないか。</p> <p>競技という部分で共通するところがある。ボールとの距離感とか。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>バスケットボールが面白くなり、地元チームの練習に加えて自分で体育馆を借りて練習したりするようになった。</p> <p>試合には 1 年目の途中から出るようになった。</p> <p>24 歳の時学校職員嘱託となり、収入が入るようになり、練習を増やした。正職の仕事につくと練習に差し障るのでつかなかった。</p> <p>2017 年、連盟のサポートにより、大手保険会社に。G 駅前の支社に週</p>

	<p>4日出社（事務補助）、その後練習という生活。仕事に行くことで1日のリズムを作りやすい。</p> <p>現在、週に5日か6日練習している。地元チーム以外に県外のチーム練習にも参加している。</p> <p>連盟に強化費が出ている関係で遠征費などは連盟持ち。</p> <p>G県からも強化費が出ており、ほとんど自己負担はない。</p> <p>重要な他者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最初に声をかけてくれた地元チームのメンバー（尊敬している）</li> <li>・競技自体の魅力</li> <li>・海外の選手からの刺激など</li> </ul>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>パラリンピック開催決定後の社会的变化が影響していると言える：仕事の形態：学校事務（嘱託・アルバイト）→保険会社へ。金銭の心配なく練習時間も確保できるようになった。県からの強化費も受けられるようになった。</p> <p>地元の先輩選手の支えや海外の選手の刺激、競技に対する向上心が車いすバスケットボール継続のモチベーションとなっている</p>
今後のスポーツ実施	<p>41、2歳の時にパラリンピックがあるのでそこまではトップ選手としていきたい。若い選手に日本代表はこういうものだというのを伝えたい。それ以降も競技は続けたい。60代、70代でも続けたい。コーチをすることはなかなか難しい。気持ちが変わればコーチになることもあるかもしれない。</p> <p>学校訪問とかはこれからもどんどんやって子どもたちに体験してもらいたい。</p>
まとめ	<p>入院、リハビリ中は医療関係者の支えや影響が大きかった。</p> <p>家族や知り合いに福祉関係者や車いす利用者がいたことから車いすユーザーとなることに対する壁が低かったと考えられる。</p> <p>そうした環境にあったことから、障害者スポーツの存在を知っており、インターネットにより、車いすバスケットボールの情報に自らアクセスすることができた。</p> <p>県内にチームがあったこと、運転免許を取得できていたことからスムーズに開始できた。</p>

地元チームのメンバーの支えやアドバイス等もスポーツ開始の重要な要素である。

スポーツ継続に際しては、仕事とプレーを両立できる環境にあることが大きな要素となっている。とりわけ企業就職後はプレーに専念できる環境にある。金銭的な負担はほとんどない。

今後は41、2歳まではトッププレーヤーとして活動し、その後も現役としてプレーしたいと考えている。指導者になる可能性もあるが、今のところそれほど大きな希望ではない。

ケガをする前は中学まで野球をしていたが、そのことは車いすバスケットボールをする上でもプラスに働いていると考えている。

(藤田紀昭)

仮名 20-Iさん

インタビュー実施日時 場所 2020年10月1日 15:00-17:00 オンライン実施

個人基本情報	居住 北海道地区 生年月日 1997年 性別 女 障害発生年齢 14歳 障害内容 下肢切断
略歴	小学校、中学校とバスケットボール部に所属。中学2年時に骨肉腫を発症し、右膝下から切断。高校時代は、女子バスケットボールのマネージャーを務める。部活動を引退した高校3年時に、地元の車いすバスケットボールチームに自ら連絡して練習に参加。入部後、大学に進学しながら競技を続ける。車いすバスケットボールのジュニア日本代表に選出され、世界選手権（25歳以下）に出場。
競技基本情報	競技：車いすバスケットボール 競技成績：2019女子U25世界選手権入賞 競技開始年齢：バスケットボール：7歳、車いすバスケットボール：18歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	経緯 骨肉腫発症時、医師から患部だけを切り、脚を残す治療法を提案される。両親もその治療法を勧めたが、足首の機能が戻らず走れなくなることを自分自身が受け入れられず、脚を残す治療法を拒否。足を切断して義足にしたら走れるかを医師に確認し、切断を決意。どんな形であれ、バスケットボールを続けたい意思が強かった。小学時代から、地元に車いすバスケットボールチームがあることを知っていたため、高校3年の部活動引退時に、車いすバスケットボールチームに連絡して練習に参加。 始めた場所：チームの練習場 重要な他者：特になし
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	2006年、国際バスケットボール連盟が主催するFIBAバスケットボール選手権大会が日本で開催された。以降、メモリアル大会として、大会で使用された会場において交流大会が開催されることになった。大会は、幅広いカテゴリーの参加者が一堂に会し、バスケットボールの普及発展に加えて、生涯スポーツとして根付くことを目的としている。カテゴリーは、U-12、U-15、U-18、一般（専門、大学、社会人）、車いす、3×3で、それぞれの参加者が集まって大会が行われる。大会参加者は、障

	害の有無にかかわらず、地元に車いすバスケットボールのチームがあることを自然に認識して記憶に残っている。
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>小学6年時にミニバスケットボール大会で全国大会まであと一歩のところまで勝ち進んでいたが、チーム内でインフルエンザが流行して、チームが勝ち上がることができなかった。ただ、当時の指導者が一つ一つのプレーに理由があることをわかりやすく説明してくれたために、自分で考えてプレーする癖がついた。それが現在、車いすバスケットボールの練習や試合で非常に生きている。</p> <p>中学時代の大会では、自らが骨肉腫を発症したため、最後の大会に参加できなかった。</p> <p>小学校、中学校と、最後の大会に悔いなく臨むことができなかっただけで、本人曰く「バスケットボールを引退できていない」。その経験が、車いすバスケットボールに挑戦するきっかけとなった。右足切断当時、パラリンピックへの出場を目標に車いすバスケットボールを始めたわけではなく、バスケットボールが好きで続けたいから車いすバスケットボールを選択した。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：車いすバスケットボールをやると、ただの障害者ではなくて、アスリートでいられる。ネガティブだった自分のイメージも変わった。</p> <p>障害に対する考え方、アスリートのマインドを教えてもらえた。</p> <p>主な実施場所：車いすバスケットボールチームの練習場</p> <p>重要な他者：チームのキャプテン（ロールモデル的存在）</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>日本代表として世界選手権に出場した姿を、中学時代の顧問が見てくれた。生配信された試合の映像が涙で見えなくなったと後日連絡があり、日本代表で活躍することができれば、これまで関わってきた人に恩返しできると認識するようになる。これまで好きだから続けていた車いすバスケットボールに、日本代表として活躍することが新たな目標として加わった。国際大会に出場して、多くの人の目に触れることで、これまで支援してもらった人たちに、自分はこれだけのことができるようになったのだと伝えることができる。感謝を伝えられる。</p> <p>小学校の恩師がいる学校に、障害者スポーツの出前教室の講師として赴いた。大人になった自分を見せられた。</p>

今後のスポーツ実施	自分がこれまでに経験してきたことや考えなどを子どもたちに伝えていきたいと考えているので、将来は教員になりたいと考えている。現在、大学でも教職課程を履修している。そのため、日本代表の活動は、ある程度の期限を持って進めていきたいと考えている。クラブチームの活動は、一生涯のスポーツとして続けられる限り続けていきたい。
まとめ	<p>骨肉腫になり、右足首を残す選択肢もあったが、手術をしても最終的にバスケットボールができないのであれば、脚を切断してバスケットボールができる可能性を探りたいと、切斷を決意。</p> <p>小学校、中学校とバスケットボールをして、右膝下の切斷後も高校ではバスケットボール部のマネージャーをしていた。バスケットボールが好きなので、どんな形であれ続けたいと考えていた。</p> <p>車いすバスケットボールをする中で、切斷したことに負い目があったが、チームメンバーと一緒に過ごすうちに、義足がむき出しの方がカッコいいと思えるようになった。</p> <p>パラリンピックに出場したいのが目標ではなく、車いすバスケットボールを続けたいのが目標であった。</p> <p>日本代表として世界選手権に出場したこと、多くの人が自分のプレーする姿を見てくれた。</p> <p>日本代表として活躍することが、これまで関わってきた人への恩返しになることが認識できたので、日本代表になることが新たな目標として加わった。</p> <p>自分の経験を子どもたちに伝えるために、将来は教員になりたい。</p>

(小淵和也)

仮名 20-Jさん

インタビュー実施日時 場所 2020年9月24日 15:00-17:00 オンライン実施

個人基本情報	居住 九州地区 生年月日 1955年 性別 男 障害発生年齢 23歳 障害内容 脊髄損傷 リハビリ期間 1年
略歴	1978年にスキー中の転倒事故により、脊髄損傷。脊髄固定手術後、関東地方の病院に転院して1年間のリハビリ。その時に、車いすバスケットボールに出会う。T県代表として全国障害者スポーツ大会に出場。1983年に車いすテニスに転向、1991年の全日本選抜車いすテニス選手権大会でメダリストとなり、翌年のバルセロナパラリンピックに出場。引退後は、2012年ロンドンパラリンピック日本代表のサポートやジュニア育成などに従事する。現在、九州の総合型地域スポーツクラブの代表理事を務める。1991年に結婚、妻は言語聴覚士。
競技基本情報	競技：スラローム（1980年全国障害者スポーツ大会出場）、車いすバスケットボール（1981年～、1982、1983、1984、1985、1986、1987年全国障害者スポーツ大会出場）、車いすテニス（1983年～、1992年バルセロナパラリンピック出場） 競技成績：全日本選抜車いすテニス選手権大会メダリスト、バルセロナパラリンピック、車いすテニスシングルス・ダブルス出場) 競技開始年齢：スラローム：25歳、車いすバスケットボール：26歳、車いすテニス：28歳
障害発生から障害者スポーツ開始まで	・車いすバスケットボール 経緯① N県内のスキー場で、スキー中の事故により脊髄損傷となった。事故後、N県内の病院で固定手術を行い1か月入院。その後、T県のリハビリセンターに転院し、リハビリを1年間続ける。リハビリセンターの看護師の配偶者（夫）であるS氏が障害者スポーツ関係者で、いろいろと情報交換をするようになる。のちにS氏から車いすバスケットボールチームに誘われて入部する。リハビリ担当の理学療法士（PT）のK氏が、アーチェリー、車いすバスケットボール、スラロームなどを勧める。 経緯② 車いすバスケットボールチームに入部後、1979年の全国身体障害者ス

	<p>ポーツ大会（宮崎県）を見学。車いすの選手が一生懸命にプレーする姿に感動する。周囲の人たちが選手に向けて応援する姿にも感銘を受け、車いすに乗っていても注目してもらえることがあるんだと実感。車いすバスケットボールに没頭していった。</p> <p>経緯③</p> <p>1980年、大手新聞社の事業の一環で主催されたオランダ・アーネムパラリンピックツアーに参加。初めてパラリンピックを観戦。海外選手のレベルの高さ、コート内外での立ち居振る舞いを目の当たりにする。本人曰く、前年の全国身体障害者スポーツ大会（宮崎県）の感動の100倍の衝撃を受け、自分もパラリンピックに出場することを決意する。</p> <p>始めた場所：都内の車いすバスケットボールチームの練習場。</p> <p>重要な他者：①スポーツの世界へと誘ったリハビリ担当だった理学療法士・K氏。②チームへと誘ったリハビリ担当看護師の夫・S氏。</p> <p>・車いすテニス</p> <p>経緯④</p> <p>1988年のソウルパラリンピック出場を目指して、車いすバスケットボールの練習に励む。日本代表強化指定選手に選出され、ストークマンデビル大会などの国際大会に出場するも、自身の持ち点に多くのライバルがあり、ソウル大会の日本代表に選出されなかった。</p> <p>経緯⑤</p> <p>パラリンピックに出場することを最優先事項として、出場競技を車いすバスケットボールから車いすテニスに変更。移行期はどちらの競技にも並行して取り組んでいたが、当時の恋人（現在の奥様）から、本気で目指すなら一つに絞った方が良いと背中を押されて、車いすテニスに絞り、バルセロナパラリンピック出場を果たす。</p> <p>始めた場所：吉田記念テニス研修センター（TTC: Tennis Training Center）。</p> <p>重要な他者：</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・TTCのY理事長。当時は車いすテニスの練習場所がなく、その現状を聞き、練習場所としてTTCを開放してくれた。</li><li>・車いすテニスへの転向を後押しした当時の恋人（現在の奥様）。</li></ul>
--	--

障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>大手新聞社が主催したパラリンピックツアー。パラリンピックを直接観戦できたことも大きいが、同行したメンバーには、のちに車いすバスケットボール連盟の会長になる人がいた。本人が言うようにツアー参加自体が大きな転機になり、スポーツに熱中するきっかけとなった。</p> <p>T県に複数の車いすバスケットボールのチームが存在していた。全国障害者スポーツ大会に出場するT県代表チームを結成する際に、各チームから選出される中で出会ったH氏の存在が大きい。当時の障害者スポーツ界におけるスーパースター。アスリートとしての振る舞い、ストイックさ、努力する姿勢など、影響力があった。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの頃からスポーツ万能だった。</li> <li>・小学校は野球と水泳三昧。</li> <li>・中学校でハンドボール。高専ではサッカー。</li> <li>・高専卒業後は、地元で社会人サッカーチームを設立しリーグ戦に参戦。</li> <li>・基本的なボール感覚は、野球、ハンドボールと車いすバスケットボール、車いすテニスにも通ずるところがある。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>車いすバスケットボール 日本代表としてパラリンピックに出場したく、厳しい練習もこなしていた。</p> <p>重要な他者：現在は障害者スポーツ界のレジェンドと呼ばれるH氏。非常にストイックで、努力のレベルが違っていた。練習量や目標の高さなど、刺激になることばかりであった。</p> <p>車いすテニス 継続状況：練習時間の確保、大会の遠征費が捻出でき、比較的、日程調整が可能な非常勤の仕事を3つ掛け持ちしながら、競技に集中できる環境を整えた。</p> <p>卒業、同棲、結婚など、自身の生活環境が変わっていく中でも調整し、2時間半かけてTTCに通った。</p> <p>主な実施場所：吉田記念テニス研修センター（TTC: Tennis Training Center）。</p> <p>重要な他者：①生活環境が変わる中でもささえてくれた妻 ②トレーニングを指導するコーチN氏。初めての指導者。大会にも帯同。</p>

スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>TTC が練習環境と指導者を提供してくれた。</li> <li>車いすバスケットボールから車いすテニスに転向した選手と一緒に練習できた。</li> </ul>
今後のスポーツ実施	<p>車いすテニスの日本代表強化に力を注ぐ。</p> <p>総合型地域スポーツクラブの代表理事の立場から地域の障害者のスポーツ環境を整備する。</p>
まとめ	<p>パラリンピックを直接観戦したこと、自分も出場したいと大きな夢をもらった。</p> <p>車いすバスケットボールでの出場が厳しくなり、当時の恋人（現在の妻）の後押しもあり、車いすテニスに転向。日本一となり、パラリンピック出場を果たす。</p> <p>車いすテニスの練習環境を提供してもらったことで練習に集中して取り組むことができた。</p> <p>上手くなりたい一心で、スーパースターの背中を追い続ける。H 氏とともに練習する中で、アスリートとしてのるべき姿を学ぶ。</p>

(小淵和也)

仮名 20-Kさん

インタビュー実施日時 場所 2020年11月5日 15:00-17:00 オンライン実施

個人基本情報	居住 関東地区 生年月日 1980年 性別 男 障害発生年齢 24歳 障害内容 視覚障害
略歴	中学・高校一貫の進学校の柔道部に所属、中学1年時にキャプテンに任命され、そのまま6年間務める。高校卒業とともに柔道と一時的に離れる。浪人1年目に右目の緑内障を発症。神経が痛む病気で一度失った視野は戻らず、右目の視力を失う。手術後、再び予備校に通い、3浪後に大学に合格して上京。大学2年時に左目の緑内障を発症。薬でも点眼でも眼圧が下がらず、急遽手術をする。手術前に聞いていた通り、視神経へのダメージが増して見えにくくなる。歯磨きできず、ご飯も食べられず、文字が読めず、人の顔の判別ができなくなる。手術後、大学には休学せずに通うが、これまで通りとはいせず、友達、家族、大学のサポートも受けながら単位を取得する。同じゼミの友人にサポートしてもらいながら、なんとか大学を卒業。当時付き合っていた恋人に、視覚障害者柔道を紹介されて、取り組み始める。就職活動では、100社以上受けた中で2社のみ面接まで進み、その中の1社（特例子会社）に就職する。その後、世界選手権、北京パラリンピックに出場。2011年に、当時の恋人（現在の奥様）の後押しを受けて起業する。事業も軌道に乗り、様々な団体・組織の理事をする傍ら、現在は複数の会社の代表取締役社長を務める。
競技基本情報	競技：視覚障害者柔道 競技成績：柔道（高校2年、3年時に県大会で入賞、二段、国体の強化選手に選出）、視覚障害者柔道（2006年フェスピック競技大会メダリスト、2008年北京パラリンピック出場、2010年アジアパラ競技大会メダリスト） 競技開始年齢：柔道：13歳、視覚障害者柔道：25歳
障害発生から 障害者スポーツ開始まで	経緯 当時の恋人に視覚障害者柔道があることを紹介され、発症後、初めて自分で何かをやってみようと思えた。日本視覚障害者柔道連盟に電話すると、3か月後の大会出場を提案される。7年ぶりに柔道の練習を再開す

	<p>る。出場すると決心すると目標ができて新鮮な気持ちになった。初めて出場した大会で、全て一本勝ちで優勝する。本人曰く「そこから人生が変わった」。</p> <p>始めた場所：高校時代の同級生が集まり練習相手となる。</p> <p>重要な他者：当時の恋人、高校の同級生</p>
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>当時の恋人が情報収集をして提案してくれた。柔道以外のスポーツを提案されてもおそらく選択はしなかった。昔からやっていた柔道だから取り組もうと考えられた。いざ、練習をすると、練習相手として高校の同級生が手伝ってくれた。視覚障害者柔道が晴眼者とでも練習可能な競技特性も後押しとなった。</p> <p>日本視覚障害者柔道連盟が、適切な情報を提供してくれた。</p> <p>初出場で優勝した大会が記念大会で、当時の皇太子と直接話す機会に恵まれる。加えて、翌年の世界選手権、アジア大会の日本代表に選出され、視力喪失により全く白紙だったスケジュールが柔道によって埋まり始めた。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<p>中・高校と柔道部であったために、身体的にも、精神的にも余裕を持って、柔道に取り組めた。</p>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況</p> <p>2006年に出場した初の国際大会（世界選手権）で惨敗。海外選手の強さを目の当たりにして、これまでの練習を見直し、より一層練習に取り組むようになる。練習内容の変更、練習相手や環境を自らが積極的に動いて探した。同年に開催されたフェスピック大会（アジア大会）で金メダルを獲得して、2008年の北京パラリンピックに出場。</p> <p>主な実施場所：練習の受け入れ先を自らで探す。</p> <p>重要な他者：</p> <p>M 氏（視覚障害者スポーツのレジェンド的存在の先輩。発症後（20歳）に柔道を始めて現在も現役選手。全盲を言い訳にせず、人生において自分のやりたいことには何でも挑戦する姿に日々刺激を受けている。</p> <p>M 氏が柔道を開始した時は体重が 60 キロしかなかったのに 10 年掛</p>

	<p>けて筋肉をつけて 100 キロの体を作り上げたと聞き感銘を受けた。努力がこれほど人を強くするのかと実感した。M 氏が引退するまでは、自分も引退できないと考えている)</p> <p>H 氏（レベル遺伝性視神経症：出会った当初、すでにパラリンピックのメダリストであったが、階級も異なり実力差があった。そこから 10 年後に同じ階級で対戦して敗退。努力の人。毎日 10 キロ走って、体がどんどん強くなって、技術力がどんどん向上していった。毎日努力を続けることで、こんなにも強くなれるのかというのを見せてもらった。武道の美しさ、すごさを教えてもらった）</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>会社がアスリーント支援制度を設立して予算的にサポート。練習時間が確保でき、トレーニングジムの費用も賄えた。</p> <p>ブラジリアン柔術の道場が近所にあり、寝技の練習ができた。</p>
今後のスポーツ実施	<p>柔道は好きなのでライフワークとしては継続していく。選手として継続するかは、2021 年の東京パラの状況を見て決めたい。どのように気持ちが動くのかは、その時になってみないと何とも言えない。</p>
まとめ	<p>発症前の柔道経験が発症後の視覚障害者柔道の開始にプラスに働いた。</p> <p>発症時に友人、恋人がサポートしてくれたことで精神的に安定した生活を送ることができ、その重要他者からの視覚障害者柔道の紹介だったため、スムーズに受け入れられた。</p> <p>高校時代の同級生が練習相手となり、視覚障害者柔道の開始の後押しをしてくれたので、孤独にならずに競技を続けられた。</p> <p>視覚障害者柔道の世界で当事者と出会い、M 氏、H 氏と過ごす中で、視覚障害者として生きていく指針を示してもらった。</p> <p>高校時代の同級生が社会で活躍している姿に刺激を受けて、自分も胸を張る生き方をしたかった。パラリンピックがその準備をすべて整えてくれた。起業し、充実した仕事ができるようになって初めて障害を受容できた。同級生にも胸を張ることができた。</p>

(小淵和也)

仮名 20-Lさん

インタビュー実施日時 場所 2020年10月26日 10:00-12:00 オンライン実施

個人基本情報	居住 関西地区 生年月日 1988年 性別 男 障害内容：右上腕の上肢 1/2 欠損（先天性）
略歴	大学院修了後、独立行政法人に就職し、その後 2016 年にアスリート雇用で T 社に転職し競技を継続している。
競技基本情報	競技：パラバドミントン（SU5 クラス） 競技成績：日本障がい者バドミントン選手権大会（シングルスマダリスト：2011 年・2012 年・2014 年・2016 年/ダブルスマダリスト：2011～2017 年）/2014 年アジアパラ競技大会（ミックスダブルスマダリスト）/2016 年アイルランドパラバドミントンインターナショナル（ダブルスマダリスト）/2016 年インドネシアパラバドミントンインターナショナル（ダブルスマダリスト）/2017 年ペルーパラバドミントンインターナショナル（シングルスマダリスト・ダブルスマダリスト）
障害発生から障害者スポーツ開始まで	保育園の頃からサッカーを始めて、小学校までは地元のサッカーカラーブで活動し、中学校からは部活動として取り組んでいた。小学校時代の体育に関して、鉄棒と縄跳びは苦手であったが、それ以外のバスケットボールやドッジボール、サッカー等、特に球技は人並み以上にできてとても楽しかった。当時、他の生徒と違うことをするのがすごく嫌で、鉄棒の補助器具を教員が準備してくれた際、その器具は障害児専用ではなく鉄棒の苦手な健常児を補助するためであったが、「自分の腕がないからそういうものを使ってもらっている」と解釈して嫌悪感があり、使うことを拒んで教員を困らせていました。  高校入学後、サッカー以外の種目に取り組みたいと思い、進学先の部活動で中学校になかった種目がハンドボールとバドミントンであり、中学校時代のサッカー部の先輩がバドミントン部に入っていたことから自分も入部した。その後、大学でもバドミントン部で競技を続け、大学卒業後は地域の社会人クラブで活動を継続し、現在は複数の大学、高校、クラブチームを活動拠点としている。  パラバドミントンとの出会いは、大学 2 年生の時（2008 年）に他大学の選手から当時の協会強化コーチであった K 氏を紹介され、K 氏が所属

	する地元の障害者バドミントンクラブの練習に参加したことがきっかけであった。その後、2011年から日本代表の強化指定選手となり、国内外の大会に出場している。
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>パラバドミントンに出会った当初は、自分自身を「障害者バドミントン」のカテゴリーに当てはめることに葛藤があったが、大会に出場する中で、国内外に自分より強い選手がいることを知り、まずはそれらの選手に勝たなければいけないと思うようになった。次第に「自分自身を障害者だと思いたくない」という気持ちは薄れていき、国際大会に出場してメダル争いができるという経験は貴重なものなのだと考えるようになり、自然と障害を受け入れられるようになっていった。</p> <p>当時の強化コーチであったK氏と知り合いパラバドミントンの世界に入ったが、高校3年生の頃から障害者バドミントンの存在を知っていたものの、当時の協会ホームページにほとんど情報がなく、「上肢障害」という表記は目にしたが、どの程度の障害を指すのか、自分自身がプレーできるのかどうかもわからず、その時に自分からアプローチをすることはなかった。</p> <p>また、初めて日本代表合宿に参加した際に出会った同じクラスの選手たちに刺激を受けた。特にU選手には初めて日本選手権に出場した時に負けてしまい、レシーブ力があり攻撃的ではないがミスをしないというプレースタイルから多くのことを学ぶことができ、U選手に勝つということがパラバドミントンを始めた当初の目標となった。同様に、車いすクラスのN選手は自分と同じく理系の大学院を修了し、メーカーの研究職に就きながらトップレベルで競技を続けており、競技を始めた当初は自分もN選手のように仕事と競技を両立したいと考えていた。</p>
受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	—
障害者スポーツ継続に関する状況	2009年に初めて日本選手権に出場し、メダリストとなり翌年のアジアパラ競技大会の派遣候補選手に推薦されたが、派遣選考会と大学の部活動の大会との日程重複により辞退した。2010年の日本選手権では、4回

	<p>生となり大学の部活動はすでに引退しており準決勝敗退となってしまったが、翌年から強化指定選手となり、国際大会に出場するようになった。そして、2014年に2020年の東京パラリンピックにパラバドミントンが採用されることが決定し、当時（大学院から独立行政法人在職中）は練習が週2～3回に留まっており、仕事と競技の両立ができていなかったことから、東京パラリンピックを見据えてアスリート雇用を考えるようになり、2016年から現所属のT社に入社し競技に専念できる環境となっている。</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>パラバドミントンに取り組む中で、当時の日本代表コーチであったT大学のK先生に強く影響を受けた。2011年の世界選手権、2012年のアジア選手権に帯同してもらい、バドミントンへの考え方、配球や基本的な技術を教わり、今まで高校・大学と専門的な指導者がいなかったので、初めて「コーチ」という存在に出会った気がした。このコーチのもとでプレーするのは本当にやりがいがあるなと思い、自分のバドミントンに対する考え方そのものに大きな影響を与えた。</p> <p>アスリート雇用に転換後、現在（コロナウィルス感染拡大前）は週5回の練習に加えて、週1～2日程度トレーニングを行っているが、バドミントンの練習に関しては3か所が主な活動拠点となっている。元協会コーチが在籍する大学と、学生時代に学連の活動でお世話になった教員の在籍する大学と、全国大会常連の高校で練習を行っている。</p> <p>複数の拠点で練習を行うメリットとして、常に同じメンバーではなく異なる学生たちと活動することで、常に刺激があり緊張感を維持できることが挙げられる。その一方で、学生の大会等のスケジュールを基準として練習メニューが設定されるので、自分自身の試合が近づいていても基礎練習をしなければならないケースが出てくることがあり、練習メニューのミスマッチに苦慮することがある。</p>
今後のスポーツ実施	<p>自分自身の競技力が上がっていくのが感じられているうちは競技を続けたいと思っている。30歳を超えてはいるが、バドミントンを始めたのが高校生からということがあり、アスリート雇用に転換をして、ここ数年でも競技力が上がってきてているという実感がある。今年は肩のケガの影響で停滞してしまったが、回復して2019年以上のパフォーマンスが発</p>

	<p>揮できると思っているので、当面は現役を続けたいと思っている。</p> <p>2024 年のパリパラリンピックを目指せるかどうかはわからないが、あと 1~2 年競技を続けていき、厳しいと思えばその時には引退すると思う。</p>
まとめ	<p>小学校時代から学校体育は一部苦手な種目があったが、他の健常児と同様に取り組むことができた。</p> <p>保育園から中学校までサッカーを続け、高校からバドミントンを始めた。</p> <p>大学時代にパラバドミントンに出会い、当初は「障害者」のカテゴリーに入ることに抵抗があったが、国内外の大会に参加する中で、ロールモデルとなる選手や指導者との出会いによって、専心的に取り組むようになった。</p> <p>パラバドミントンのパラリンピック採用決定を機に、アスリート雇用に転換し、競技中心の生活を送っている。</p> <p>2024 年のパリパラリンピックを目指すかどうかはわからないが、自分自身が上手くなっていると感じられるうちは競技を続けていきたいと考えている。</p>

(河西正博)

仮名 20-Mさん

インタビュー実施日時 場所 2020年8月23日 15:00-16:30 オンライン実施

個人基本情報	居住 九州地区 生年月日 1977年 性別 男 障害発生年齢 18歳 障害内容 脊髄損傷 リハビリ期間 約1年
略歴	事故前 高校生 未婚 現在、福岡の会社でアルバイト（事務）
競技基本情報	競技：陸上（T53）、 競技成績：全国障害者スポーツ大会（100m・200mメダリスト）、IPC公認世界ランキング30位以内（自己最高） 競技開始年齢：陸上（25歳頃～）
障害発生から 障害者スポーツ開始まで	経緯：高校を卒業する直前、車で運転中の事故により脊髄損傷となった。リハビリ期間は1年程度。リハビリの一環で車いすテニスを入院患者同士で行っていた。リハビリ後はコンピュータ系の専門学校に通い、医療系に就職。スポーツは全く行っていなかった。25歳頃、せき損センターで知り合った同じ障害のパラ陸上の選手から、練習を見においてと誘われ、体験をしたことがきっかけとなり車いす陸上を始めた。1～2年の間は、同じ障害レベルの選手から昔使用していた競技用車いすを借りて練習を行った。最初はリハビリの一環で行っていたが、練習を一緒に行うメンバーに日本代表選手がいたこと、大会に出る度にタイムが良くなつたことから、競技者として取り組むようになった。また、大分国際車いすマラソンを直接見にいったことも影響している。最初は自己流で練習を行ってきたが、2017年頃、同じ障害クラスの選手から指導を受けたことがきっかけとなりパラリンピックを目指すようになった。 始めた場所：九州地区の車いすが走行できる道路（車いす陸上の選手らの練習場所）。現在は、九州地区の陸上競技場。 重要な他者：せき損センターで出会った車いす陸上選手。日本選手権で出会った車いす陸上選手。障害者スポーツセンター職員。
障害者スポーツ開始に影響を与えた社会的状況・環境・条件	入院中は障害者スポーツのことは考えたことがなかったが、せき損センターで出会った車いす陸上選手から車いす陸上を見に来ないかと誘われたことがきっかけとなり車いす陸上を始めた。競技用の車いすを持っていなかったが、同じ障害レベルの選手から昔使用していた競技用車いすを借りて練習を行えたことも競技の継続につながっている。

受傷前スポーツ経験が障害者スポーツ開始に与えた影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの頃から運動が好き。</li> <li>小学校時代はソフトボール。中学校、高校はバレーボール。</li> <li>仲間と楽しくスポーツを行ってきた。</li> </ul>
障害者スポーツ継続に関する状況	<p>継続状況：以前は週に5回練習していたが、現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で週に1~2回と減っている。アスリート雇用ではないため、練習や大会にかかる費用はすべて自費。専属のコーチはいないが、一緒に練習を行っている日本代表選手にフォームの改善などアドバイスをもらっている。トレーニングについては、ボランティアでトレーナーから指導を受けている。事故後からいつも応援してくれている弟がおり、大会を見に来てくれている。</p> <p>主な実施場所：九州地区の陸上競技場</p> <p>重要な他者：車いす陸上日本代表選手。弟。</p>
スポーツ継続に影響を与えた社会的状況・環境・条件	<p>練習可能な陸上競技場があり、パラリンピック開催決定の影響等で以前と比べ車いすが使用しやすくなったこと。</p> <p>練習を行う選手の中に日本トップレベルの選手がおり、的確なアドバイスを受けることができる。</p> <p>トレーナーからのトレーニング指導を受けられること。</p>
今後のスポーツ実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>パラリンピック出場を目指す。</li> </ul>
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>せき損センターで知り合った同じ障害のパラ陸上の選手からの誘いでリハビリの一環として車いす陸上を始めた。</li> <li>競技用車いすは持っていないかったが、同じ障害レベルの選手から昔使用していた競技用車いすを借りて練習することができた。</li> <li>練習仲間に車いす陸上日本代表選手がいたこと、実際に大会を見たことがきっかけとなり、本格的に競技を始めた。</li> <li>専属のコーチはいないが、パラリンピックを目指す日本代表選手らと練習ができる環境があること、トレーナーの支援があることはスポーツ継続に影響している。</li> </ul>

(兒玉 友)